

游撃

共産主義者同盟政治機関紙

第42号

1978.4.5

定価 200円

発行人 北沢晋
発行所 游撃社
連絡先 東京都世田谷区
千歳郵便局
千歳4
私書箱4
振替 東京0-195783
10回2000円(開封・送料共)
2500円(密封・送料共)

☆帝国主義の腐朽性に抗し、社会帝国主義・社会排外主義と対決して世界革命の最前線へ！
☆日帝の朝鮮侵略反革命を国内戦へ転化せよ！
☆帝国主義心臓部にプロレタリアートの総蜂起を！

今号の内容

- ◆ 遂に三月開港を爆砕！ 報復弾圧をはねのけ、五月開港阻止法戦へ進撃せよ！
- ◆ 「成田特別治安立法」阻止 深まる「韓国経済」の危機
- ◆ 学習欄(2)「国家と革命」

されている。この革命派に対する集中的な反革命弾圧の質こそ今日の階級闘争が言葉の真の意味で革命と革命の問題を鮮明にしていることを示している。すでに日帝は昨年五月、八東山君の虐殺を完全に居直り、千葉地裁自身が依頼した木村鑑定を投げ捨て、御用鑑定医の報告を一方的に取り上げることにより、「反対派の投石が原因」などという誰一人として信じるものがない珍奇なデッチ上げを行ったのである。これこそは、この間の三里塚における機動隊の反革命殺人攻撃を賛美し、正当化し一層の革命派を殺すよう励ますものに他ならない。それは「反対派を一人残らず射殺しろ」と絶叫する自民党中川、瀬戸山らの極悪反革命分子が主張しているように日帝の凶悪な反革命弾圧に打って出んとする決意を示している。

また一方で「過激派と反対派農民は別である」などと何と反対同盟と労働者・学生を分断を計らんと画策し急進反対同盟・農民との対話のポーズをとりつくりわんとしている。

だが反対同盟農民は、この対話のポーズが管制塔占拠闘争によって始めて十三年ぶりの会談が成立したことを見ても分かるように、きわめてぎまんの代物ではないことを見抜いている。これは対話ではなく警告だとはっきり言いつつ、三里塚農民の闘いは今日日帝・公団に何一つとして甘い期待などは持っていないのだ。

事実、日帝・公団はこの間にも横堀要塞を押し、団結小屋撤去策動、更には第二期工事区域内一帯への除草剤の散布という攻撃を見るだけでもそのぎまんの性は明白である。

しかも、この決定的重要局面で白々しくも政府と反対同盟の「仲介」に乗り出さんとした総評富塚は犯罪者であるばかりか、むしろ滑りやすいである。反対同盟農民がこの「仲介」申し込めを「麻痺が前提ならば」と冷やかに突き返し、きっぱりと拒否したことは当然のことである。

総評・富塚が政労交渉の場で開港協力を表明したことを忘れてはならない。ここにこそ今日の階級情勢の中で彼ら社会排外主義者の役割があるのだ。だが情勢のつまりは、かかる社会排外主義者供の皮をはがさずにはおかない。彼らは何を語ろうとも、それが誰の利益に沿うものであるかを闘う労働者・農民は知り抜いているのだ。

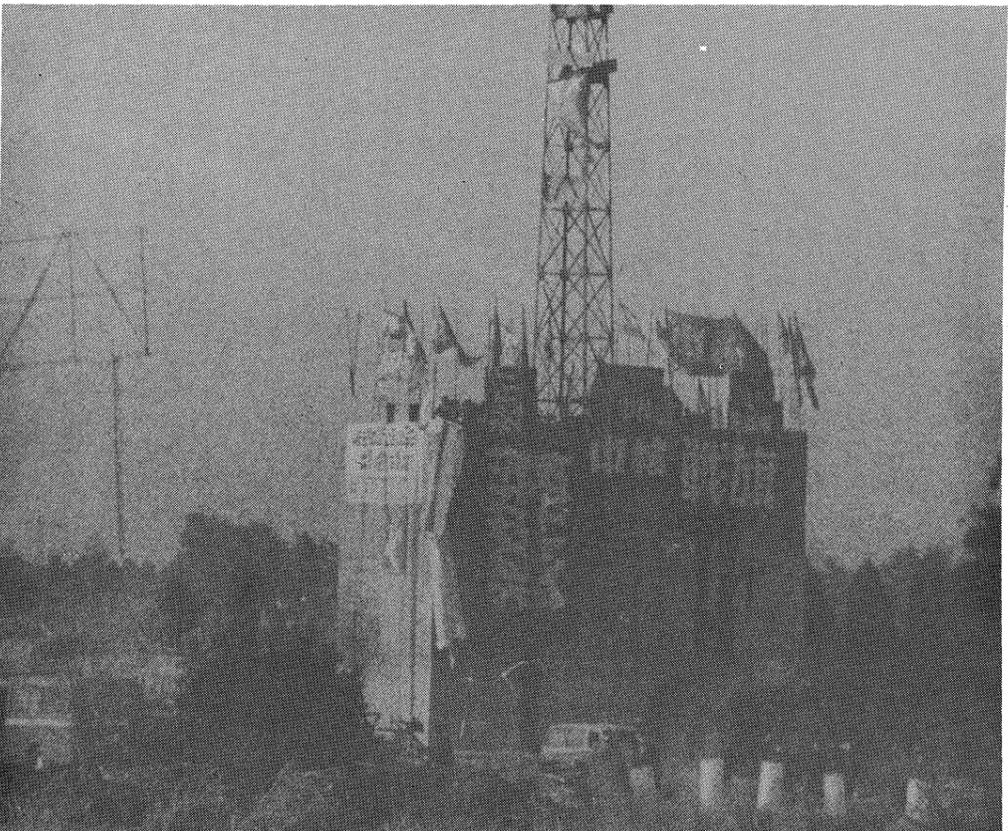
(二面につづく)

を戦撃の迫る港廃

管制塔占拠—横堀要塞死守戦断固支持！ あらゆる報復弾圧を突破し

5・20出直し開港を爆砕せよ

全国の同志諸君！三里塚闘争はいよいよもって歴史的決戦の只中に突入しようとしている。
三・二六管制塔占拠、破壊、更に横堀要塞死守戦の大爆発は、日帝ブルジョアをして根底から震憾せしめた。今や我々は、この大勝利の機をつかんで、連続怒涛の大進撃を開始しなければならない。敵権力・公団は、この大敗北を前にして、成田特別新立法攻撃をはじめとした報復弾圧で何とか逃げ切ろうとしている。しかしこうした報復も、三里塚北総の全人民を抹殺する以外に何の解決もない。三里塚農民の勝利は確実である。敵の拳銃乱射を労働者の団結ではねかえし、五・二〇決戦完全廃港を、真紅の遊撃旗は常に闘う人民と共にある。いざ決戦へ怒涛の進撃を開始せよ！



管制塔占拠—横堀要塞戦につづき5月開港を爆砕せよ

三・二六管制塔占拠—破壊の実現はついに三月開港を完全に粉砕した。この勝利こそは日本階級闘争史を飾る輝かしい金字塔であり、暴虐につぐ暴虐をもつて開港を押し進めてきた日帝に対する三里塚反対同盟と全国の闘う労働者のきっぱりとした回答である。この管制塔占拠を実現した力こそ三里塚農民と全国の闘う労働者・学生の十年を越える闘いの全成果と全蓄積であり、三・二六戦闘こそはそれを一挙的に爆発させたものである。

当日、国家的威信をかけて投入された「安保闘争以来」と言われる一万四千人の大量の国家警察軍—機動隊が横堀要塞、第一公園更には無制限に展開されるゲリラ戦という北総台地を席巻する闘いを前に分散させられ、釘付けにさせられる中で、ついに闘う労働者・学生はその闘闘精神を如何なく発揮し管制塔占拠の偉大な勝利を勝ちとったのだ。この勝利は決してブル新が書き立てるような「警備上のミス」などではない。それは敵権力内部での

五・二〇開港阻止 東山君虐殺弾劾 治安弾圧粉砕 5・7 開港阻止東京大集会

4・22 四・一九蜂起18周年朝鮮連帯集会

午後6時 南部労政会館 主催 4・22集会実行委

正午 代々木公園

三里塚闘争が今日の階級闘争の最も凝縮した構図をつくり出していると言ふとき、それはこのことを言っているのだ。そこではいさゝかあまいさきは許されぬ。反革命はどんな装いをこらそうともその本質をさらけ出すざるをえないし、革命派もまたそこでは情容しやなくふるいにかけられるのだ。

この三・二六管制塔占拠の快挙が生み出した階級攻防の質を正しく把握しなければならぬ。それは日帝・福田にとつての最重要課題としてあつた「成田開港」・「不況一内高対策」・「日中問題」がどれ一つとして満足に進められないという完全な、そして当然のことであるが経済外交問題での破綻に最後のとどめをさすのが三・二六管制塔占拠の快挙であつた。

かかる政府危機（統治能力の喪失）があらさまになるなかで、支配階級は今日の「上層も下層もこれまで通りにはやっていたい」と感ずるに至つた。時代における支配の危機を、より一層の凶悪なむき出しの反革命国家暴力によつて革命党と闘う労働者階級人民を弾圧し、闘いの火の手が広汎に動労被搾取人民と結びつくことを分断し、屈服することによつて突破せんとしているのだ。

全国的労働者諸君！すでに勝利の突破口は切り拓かれた。三・三〇開港粉砕の大勝利をひきつぎ五・二〇開港粉砕へと進撃しなければならぬ。三・二六管制塔占拠闘争に腰を抜した日帝はなりふりかまわぬ弾圧に打つて出てきている。だが三・三〇開港を打ち砕き勝利の確信を打ち固めた闘う農民、労働者にとつてもはや恐れるものは何もない。

直ちに隊伍を組み直し五・二〇決戦に決起せよ！福田はなんとか国家的威信を保とうとして四・三〇訪米・五月「成田開港」をもつて起死回生を計らんとしている。空港完全廃港に追い込み福田内閣に最後のとどめをさせ、今こそ帝國主義者供を心底ふるえあがらせる革命派の大登壇を勝ちとれ！

闘う労働者・農民諸君！帝國主義の暴政は決して未来永劫のものではない。それは闘う労働者農民の力によつて必ずや痛撃を被らねばならぬのだ！というところが今や完全に実証されたではないか。

今日、三里塚闘争がすでに明らかにした様に増々その危機の度を深める日帝の凶悪な侵略反革命攻撃と労働者階級・農民の鋭い対立を最も凝縮的に示すところのものであることは繰り返すまでもないことであるが、この革命と反革命の非和解的衝突を形づくる根拠を明らかにし、日本階級闘争の現在を如何なる観点において把握できるかを明らかにすることなくして革命の正しい指導を確立することはできない。

勤労被搾取大衆と 団結せよ！

今日、「もはや戦争でもないかぎりやっていたい」と公言するに至るまでその危機感を深める日帝によつて侵略と反革命への道こそが唯一の延命の道となつていく。それはこの間、帝國主義國間貿易を巡る争闘において「日本がスケープ・ゴートとして袋だたきにあつていく」と宣言し国民の危機感を煽り立てていることにも

示されるように、排外主義的に国民を動員し己れの侵略反革命を正当化せんとしているのだ。

しかも、一方からはかかる日帝の危機意識を代弁し、「日本の実状を説明し、日本のドジャブリ輸出への風あたりを弱めるため」と称した「労働外交」なるものに「C・総評」こそ身を乗り出すという「社会主義を看板にしながらかその実、排外主義者（社会排外主義者）の積極的支援もとりつけている。

彼ら労働指導部は今七八春闘に際しても、日経連の提唱する「生活防衛と企業防衛の同心同軌的解決」に同調するために必要である主張する始末である。だから総評幹部の言うところの「太田・池田会談のように横枝・福田会談をつくりあげる」という意気込みも、実は日本資本主義を維持し救済するために我々をそれ相当に扱えと要求しているにすぎないのである。

だが、かかる労働指導部のもはや形が化しレモニ化した「春闘談議」をよそに、増々労働者、勤労被搾取大衆の生活圧迫は増大しているのが現実である。相次ぐ不況倒産、首切りが労働者をして「明日は我が身」と実感されるまでに広がり、時には労働執行部自ら組合

開港爆砕・決戦の三里塚へ！

春期・統一実運動の革命的飛躍をかけ

員の希望退職を募り、退職届けを集める（波止浜造船）という事態すらみられるなかで、自分達の労働指導部が決して頼りにならないことを身にしみて思い知らされているのである。

このことは政府の農産物輸入拡大、減反政策という独占のもとに農民を取奪せんとする攻撃に立ち上つた農民においても同様である。減反に苦しむ農村青年を中心とする農民の怒りは、戦後保守基盤をゆるがし行政独占に対する闘いへとその矛先が向けられつつある。

今日、福田内閣「自民党政治」に対する勤労被搾取大衆の支持率は見るも無残なほどの凋落傾向を示していることは周知の事実である。

これは今日、勤労被搾取大衆の上に重くのしかかる生活圧迫が現在の支配階級と、それを代表する自民党政治によつては何一つとして解決しえないことを見抜いているからに他ならない。しかもこの自民党政治からの勤労被搾取大衆の離反が必ずしも既成革新諸党の支持率の増大へと結集してはいないことに注目しなければならない。

まさしく今、労働者、農民は自らの置かれた立場を理解しはじめると同時に、ではどうすれば現在のこの困苦を打開するのかわかっている。しかもこの現状の打開を、すなわち自らの将来を「革新」政党内託することできないことを身をもって知りつつある。かかる「革新」政党内託は、労働者・農民の疑問と要求を何一つとして満足な回答を出しえないばかりか、いくばくかの改良の果実でもって忍従することを要求している。「資本主義の健全な発展のために」／＼（ことを見破りつつある。今、労働者・農民は誰と手を切り、誰と手を結ばなければならないのかを見出しつつある。そして三里塚闘争こそ、この闘う労働者・農民の大合流する日本階級闘争の管制高地であり、この労働者・農民の大合流こそ今日の三里塚闘争の大高揚をつくり出した原動力に他ならない。

全国の闘う労働者諸君！諸君はこの現在各地で湧きあがる労働者、農民の闘いをできるだけ多くの仲間へ告げ知らせなければならない。わけても三里塚の闘いをより一層広汎に紹介し、この闘いの意義を説明しなければならぬ。三里塚農民の闘いを、そして三・二六管制塔占

拠の突出した闘いを絶対に孤立させてはならないこと、そのためには労働者大衆の広汎な支持と決起が絶対不可欠であることを訴えていかなければならない。職場や組合や地域のありとあらゆる機会をとらえて討論をまき起せばならない。

今日、わが国の階級情勢はきわめて広汎に活性化しつつある。それは日本帝國主義が完全にいきづまり、その犠牲が集中的に労働者大衆の上においかぶさつていく。日々増加するそのほとんどが中小企業である倒産件数や失業者の実態は、とりわけ今日の構造不況が中小未組織労働者、女性労働者、中高年齢層にむきよせられていることを示している。もとより基幹産業労働者においても鉄鋼、造船の四分台妥協にみられるように実質的な賃金切り下げ、労働強化が進行している。このような資本の攻撃に対し労働指導部「労働貴族が今や完全に指導性を喪失しているばかりか、むしろ労働者に困苦への恐れを「指導」しているのである。

同盟・J・C系労組指導部においては総評指導部の大言壮語や日和見主義者特有の動揺はない。そこにあるのはあけすけな侵略への衝動であり「雇用確保を兵器の国産化で」（造船重機機連）と公言するに至つて、だが総評指導部も「官公労のJ・C化」と指摘さ

全連の全郵政との統一方針や「民主的規制論」にみられるように官公労、民間の区別なく右傾化は進行している。これらの労働貴族の目的は帝國主義本國労働者の排外主義的動員にあることをはつきりと見抜いていかなければならない。

かかる事態を前にして労働者大衆は今大きく選択を迫られている。自らの困苦を打開する方向と力を模索しはじめていく。

それは現時点では未だ「執行部不信」「組合離れ」という現象であるとしても、彼らが現状を打破する力と確信を見出したとき、労働者大衆の不満・憤激は巨大な奔流となつてはばり出るだろう。だが労働者階級は自らの要求を掲げて闘うかぎりでは自らを指導的階級へと高め上げることができない。労働者階級はあらゆる勤労被搾取大衆の闘いと結びつき、勤労被搾取大衆の根本的利益が労働者階級の利益と分かちがたく結びついていくことを明らかにしたときにこそ、労働者階級は指導的階級となることができ、そのイデオロギーは指導的イデオロギーとなり得るのである。

我が党は共産主義と労働運動の結合を共産主義の啓蒙主義的宣伝に陥し込めることに反対してきた。むしろかかる情勢の中でこそ党の綱領は実地に検証されるのであり、この局面にこそ革命党の指導が切り結ばなくてはならない。

労働運動の革命的飛躍を！

共産主義者は、かかる広汎な労働者階級の活性化局面に（こう言つてよければ）融合しなければならぬ。もともと融合する方法を習得しなければならぬ。そこで共産主義者の活動は資本の悪質な労働者支配を暴露し、労働指導部の無力さ、犯罪性を大衆的に明らかにすることではなければならない。この点においていささかも手をゆるめることがあってはならない。

だが同時に、共産主義者の任務をこのことにとどめてはならない。この暴露にとどまるならばそれは左翼反対派にしかなり得ないだろう。

今日、労働者は自分達の闘いが労働指導部のやり方では何一つとして勝利することができないことをよく知っている。そこでは闘う労働者による創意と工夫をこらしたたかわれている。例えば資本の倒産攻撃に対する自主管理・自主生産の闘いが今広がりつつある。労働

者はこのような資本の経営権に介入し工場を管理して闘いの中で組織性とその能力を高めていくことができる。

かかる倒産攻撃に対する労働者の生産管理闘争がベトリカメララ組の闘いが示すように、労働者の団結を維持し闘い抜くことが可能とし、また多くの倒産企業で苦闘する労働者に闘いの方向と可能性を与える大きな励ましとなつていくことを見なければならぬが、しかし一方

でかかる資本主義体制下での労働者の生活と権利を守る自主生産の闘いと社会主義建設におけるプロレタリアートの政治的・経済的権力の問題とを混同し、「労働者自己権力」なる概念で直結せんとする。「生産管理」・「社会主義革命論」ともいうべきものが、資本の支配はもとより既成の組合指導への反発の表現として今日の戦闘的労働者も「労働者の自立」の欲求に一つの方向を与えらるものであるかのごとく語られているが、かかる内容は対しては批判的でないければならない。（この点については別途明らかにしたい）

今日、闘う労働者は柔軟かつ多様に労働者大衆の闘いの方向をつくり出していかなければならない。そこでは今日の不況の原因とそれを労働者の犠牲へと転化する資本家のやり口を具体的に、わかりやすく説明しなければならぬ。

そして労働組合が結成されていなくともでは組合を又組合執行部が完全に資本の手先になりさがつていくところでは（それが組合員の共通の認識になつていくところでは）公然と、時には非公然に大衆的な闘争委員会を形成し資本、御執行部の重囲に抗して闘うことを恐れてはならない。しかもかかる大衆的な闘争委員会は組合を戦闘化させ、もしくは労働組合（法律的な意味のそれではなくとも）の形成へとつながっていくものでなければならず、労働組合とはなにかしら別個な「闘争同盟」を夢想することではない。

この労働者大衆の憤激に形と方向を与えていくかかる活動は労働運動内部での分岐を自ら強調するセクト主義的誤りを克服することによつてこそ可能であるのだ。わが党はこの間、三里塚を闘う労働者統一実の形成に多くの力を注いできた。

今日の三里塚闘争が広範な労働者大衆の決起を要求している。それは、労働者階級が三・二六管制塔占拠の闘いを断固として支持し、権力の破防的弾圧から革命派の闘いを防衛し切ること、その為には広範な労働者階級の支持と決起を不可欠としているのである。

と同時に、今日既成「革新」政党内託は、勤労被搾取大衆の困苦の現状を打破する能力も決意もないことが明らかにするなかで、今日三里塚闘争に結集し闘い抜いている農民、戦闘的労働者の闘いのなかにこそ、現状を打開し、帝國主義の暴虐を打ち砕き資本主義を革命によつて打倒する力が成長しはじめていくこと、勤労被搾取大衆の将来はかかる勢力によつてこそ切り拓けるのだということを労働者大衆の前に明らかにすることが必要である。それはすでに明らかにしたように、労働者大

衆の広汎な決起をつくり出し農民の闘いに対する断固とした支持の立場から、あらゆる権力の暴虐の先頭に立ちま

ることを組織するものである。この任務をもつて結成された統一実人民共闘連合「草の根民主主義運動」や左翼大連合とは明確に区別されたものである。

それは資本主義の暴虐の下で日々苦痛の中から成長した主体たるプロレタリアートがその先頭に立ち帝國主義の支配と闘うあらゆる勤労被搾取大衆の闘い、民主主義的憤激をも広汎に結集させた社会主義に向う一大革命勢力（それは社会主義統一戦線と呼ぶにふさわしいものである）を形成していく第一歩である。しかも今やそのための客観的・主観的条件は十分に成熟している。問われているのは革命的指導部の立ち遅れをこそ早急に克服し、日本階級闘争を一步も二歩も前進させる革命的指導の確立をなすしかなければならぬのだ。

なせならば、すでに命脈のつきたブルジョアジーに代るべき日本プロレタリアートは今や荒々しく成長を遂げつつあり、今まさに歴史の舞台にかけのぼろうとしているからだ。

我が党は昨年の十・一四「反帝、反社帝、反覇権人民大集会」を成功させて、今日の日本階級闘争の中にマルクス・レーニン主義を復権し毛沢東思想を正しく評価する政治思想潮流を確立しつつある。

それは反スタ・トロツキズム諸派がアジアの革命運動の現実と実践的に結合しえない空論主義から未だ抜け出すことができず、またプロレタリアートの指導的階級としての歴史的、社会的地位と農民をはじめとする勤労被搾取大衆の関係を正しく位置づけることができない急進民主主義にとどまっていたなかで、この十・一四集会の提起した基調こそは今後より一層発展させねばならぬ。我々は、こうした地平を断固として継承し、革命党建

設の一層の強化に向け進撃しなければならぬ。すでに明らかなるように日本労働階級の革命的指導的立場の堅持によつて、革命的情勢の接近に即応する闘いが要求されているのである。とりわけ五月三里塚決戦こそは、階級闘争の革命的転質のかかった八〇年代への橋頭である。

全国の闘う労働者諸君！今や諸君の闘いの方向は決せられた。三・三〇開港の破産にあわてふためく日帝を更に追いつめよ！五・二〇開港の策動を打ち砕き三里塚空港を完全廃港に追いこめ！

すでに三里塚芝山連合空港反対同盟は、五・七東京大集会をよびかけ全国の闘う労働者の結果をよびかけている。この集会こそは運輸省・公団の「対話」なる白々しい願望を打ち砕き、あくまでも敢然と闘い抜く三里塚農民と労働者の更なる戦闘宣言である。

この五・七東京大集会、そして五・二〇に向けた現地実力闘争により広範な労働者大衆の結果をもちとらねばならない。今こそ労働者と農民の大合流を実現し日本革命の新たな一ページを切り拓け！

決戦の三里塚へ！

敵の報復弾圧・特別治安立法策動をはねのけ

五月、怒涛の追撃戦を

ついに三里塚反対同盟と全国の闘う労働者の総力を挙げた開港阻止決戦は、日帝・公団の「三月開港」攻撃を文字どおり人民の総決起と実力進撃の大爆発によって木端微塵に粉砕した。

まさに、三・二五横堀要塞死守戦、三・二六全国から決起した巨万の闘争的労働者による怒涛の大進撃の中、北総台地を火炎のルツボと化し、敵の未曾有の軍事網を各所で寸断突破し空襲突入、管制塔占拠破壊が闘いとられ開港阻止決戦の初戦において偉大な勝利を収めた。

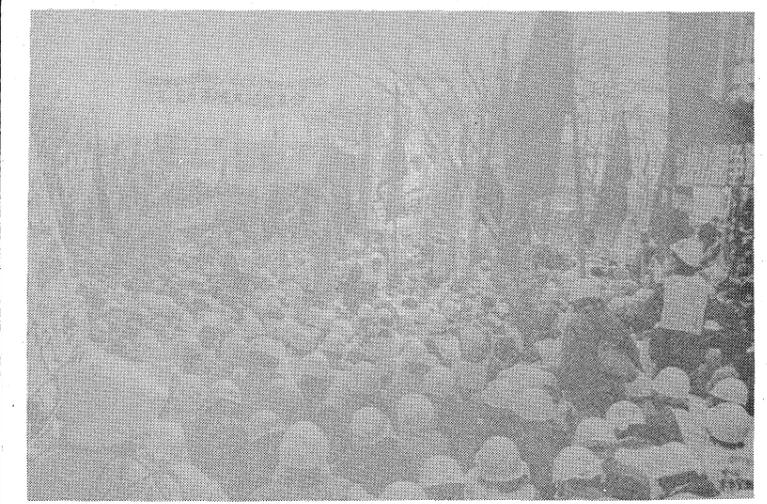
今や三里塚闘争は日本階級闘争の未踏の地平へと突入し、日帝福田をして「あれは一部農民の反対運動などではない、革命闘争の始まりだ」と言わしめたごくごく革命と反革命が真正面から激突する局地的内乱、部分的蜂起の時代、即ち革命情勢の端緒が確実に闘いとられているのだ。

三月開港阻止決戦の革命的大高揚は、三里塚闘争十二年余に亘る反対同盟を中軸とした闘争的労働者の流血の激闘、とりわけ七一年九・一六開港、七二年五月四日開港闘争が切り拓いた地平の断固とした継承発展の内に克ちとられたものである。

昨年五月岩山大鉄塔崩壊、東山氏虐殺、よねばあさんの畑畑奪、二月横堀要塞攻撃と日帝自らブルジョア法をかき取り捨て、「国家的威信」のみを根拠に奇襲的内戦鎮圧・反革命的露骨な激化をもつて三月開港を強行せんとした日帝の反革命的野望は人民の決起

を押しとどめるどころか更なる爆発を呼び起して来た事を如実に物語った。

三月二十四日、再びあの不屈の岩横堀要塞に二〇メートルの鉄塔が打ち上げられ決戦の烽火が上がったこの時を期して反対同盟北原事務局長、石井武氏、秋葉哲氏を含む五二戦士の決死的激闘が開始された。二月二十五日、未曾有の機動隊による殺人的攻撃に対し要塞戦士は圧倒的な反撃で迎撃し、敵を一步も寄せ付けないまま撃退し敢然と闘い抜き、開港実力阻止決戦の攻勢的突破口を切り拓いたのだ。三月二十六日、全国より決起した



3.26 三里塚現地に全国から結集した労働者

この偉大な勝利を手中にした反対同盟と労働者は、四月二日三里塚現地に於いて一万四千の大結集の下、決戦勝利集会を勝ち取ると共に、日帝の反革命弾圧を断固として粉砕する中で五月開港策動を更なる猛追撃戦の貫徹をもつて粉砕し抜く決意を打ち固め、空港を包囲する戦闘的デモを機動隊の弾圧を踏みしだき闘い取った。

かかるプロレタリアート人民の武装的革命的激闘に対し日帝はトコトン追い詰められ恐怖を隠そうとしない。空襲突入戦士に対するX銃射はもとより、「あんな奴は機関銃で皆殺ししろ」と革命的な人民に対する憎悪をむき出しにしている。更に破防法の適用や特別治安立法の成立を既成野党を巻き込んで画策し、団結小屋の撤去を含む闘う人民の虐殺をも辞さぬ抹殺をもつて三里塚闘争の圧殺に乗り出さんとしている。

労働者階級の革命的布陣を

これら日帝権力の予防反革命治安弾圧の一挙のエスカレートは、この間のハイジャックを口実とした「過激派」裁判における弁護人抜き裁判や刑法・刑法改悪攻撃が、単に「過激派」対策一般としてあるのではなく、決定的に言わねば三月開港の失敗を警備上の問題へ一面化するベテにも表れているように、今日出口なき危機に立たされている日本帝国主义が零落する農民層や流動化する諸階級諸層の憤激の発現に対し強権的支配をもつて延命せんとする反革命攻撃であり、天皇制・天皇制イデオロギイ攻撃を中軸とした排外主義国民統合をもつてする侵略反革命の打ち固めに他ならない。

三里塚開港阻止決戦にみられた階級の激闘は、労働者階級人民の階級深部からの不満憤激を基盤として起りつつある階級流動と軌を一にしているのである。

革命情勢のこうしたドラスティックなつまりの中にあつて、既成労働運動指導部の排外主義的対応も露骨に進行している。七八春闘において同盟・JCを始めとして総評指導部を含む既成労働者、労働者の不満を封じ込め未曾有の不況倒産、失業に苦しむ下層労働者の犠牲の上に築かれた「春闘」

女性差別—家庭・育児への隷属化強める育休制

昨年二月抜き打ちにかけられた横浜・川崎両市の専決条例化攻撃をはじめとして全国各自治体において育児休業制度の導入が積極的に進められている。七五年七月に教員・看護婦・保育の三職種の女性労働者を対象として成立した育児休業法は、業務の円滑な実施のために子育て期（至後一年）の女性労働者を一年間職場から排除し、無給で家庭で子育てに専念させる制度である。すでに電々公社電話交換手や民間企業（女性労働者の多い食品・繊維・電機関係等）では、雇用確保と一時帰休をかね備えた制度として活用されてきた。育児法はこれら民間の先行実施を公認・推奨し、「家庭生活と職業生活の調和（七二年労働婦人福祉法）」を基調とする七〇年代婦人労働政策のうち固めとして登場したのである。福祉法

日帝の戦後経済成長は、技術革新・合理化の下に多くの未熟労働力の登用を不可避とした。とりわけ六〇年代高度経済成長期において、多くの女性がウーマン・パワー政策の下に、低賃金・景気の調節弁の労働力として狩り出されてきたのである。それは歴史的な男女の分業を前提とし、子生み・子育てや家事、老人・病人の介護等、交換価値を生まない一切の事務を支配の基礎たる個別家族、とりわけ女性に担わせつつ、資本のあくなき搾取にさらすという「家内奴隷」と「賃金奴隷」の二重のくびきに女性労働者を押し込めるものに他ならなかった。だが、それと同時に女性労働者者の大量創出は、女性自身が資本家との直接的対峙を通して、あるいは顕在化する「家内奴隷」のくびきと

緊急アピール 獄中戦士を即時奪還せよ！ 共産主義者同盟弾対部

全国の同志諸君、三三〇開港革命特別治安立法をはじめと開港阻止決戦の大勝利の中で、不たあらん限りの報復攻撃に出ても逮捕されたわが革命戦線きたのである。

わが同盟は、今三里塚開港阻止闘争を、反対同盟をはじめとと果敢に闘い、要塞死守戦を貫で闘い、とりわけ、三・二六を徹し、不当逮捕された。

頂点とした実力闘争の大勝利の、北原事務局長をはじめとした一六八名全労働者の先頭で闘い抜いた。

日帝・公団による二年間にわたる反革命攻撃を常にその数倍の反撃で打返してきた反対同盟、同志諸君、わが同志連帯に全力を挙げて決戦して労働者の闘いは、今決戦の大勝利で、一大攻勢、追撃戦に突入したのである。

この為、日帝国家権力は、反振替 東京〇一九五七八三を集中せよ！

労働者内部の分断に拍車をかけ、「働き続けえない」状況を固定化するのみならず、自らさらなる拡大への墓穴を掘る以外の何ものでもない。

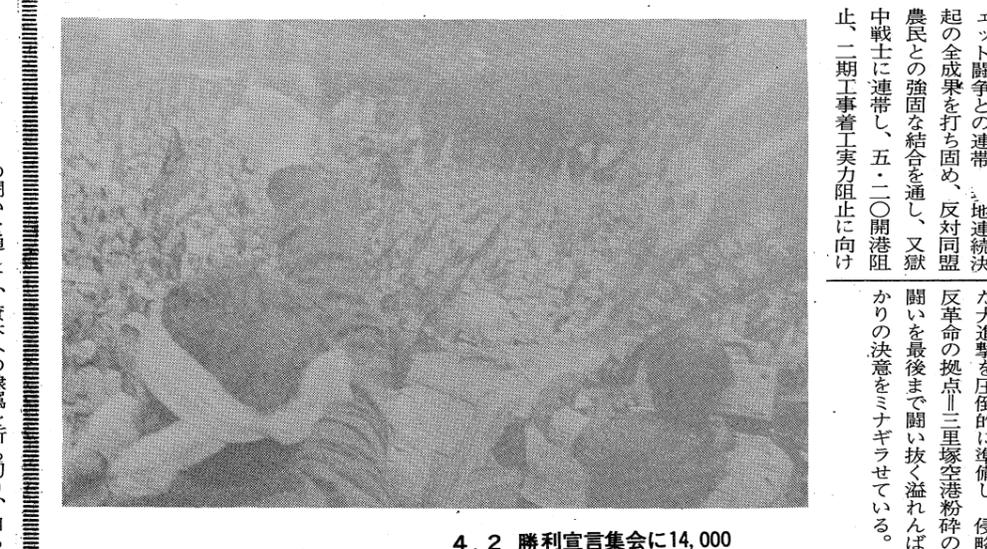
このように育休制度は、女性差別の社会意識を利す用いつつ、さらにその根拠を打ち固めるものに他ならず、女性労働者内部を分断し、女性差別への屈服をもたらし以外の何ものでもない。

昨年二月の「国際婦人年行動計画」がはつきりと示したように、まさに日帝は国内支配秩序再編の一環として、女性差別の拡大再編をはかりつつある。それは「健全なる家庭の維持」の中核に女性をすえ、その責務を全うさせることを強調し、そのうえで「能力開発」の名の下に労働力のさらなる有効活用・搾取強化をはかり、女性労働者内部に融和主義を生み出して分断を拡大する意図を明確に打ち出している。育休攻撃はその思想的・実体的打ち固めであり、社共・社派・社会排外主義、またそれに追随する四口右翼日和見主義が、融和攻撃に積極的にくみみしていることを見抜かなければならない。

うではなく、育休が生み出される基盤に踏み込み、実態化阻止・制度粉砕に向けてその基盤自体を解体する闘いを貫徹することが問われているのである。それは職場・家庭に日々生起する「家内奴隷」と「賃金奴隷」の二重の差別・抑圧との闘いであり、「男性の専制支配」を背景とした女性差別思想・諸制度との闘いとして組織されなければならない。

賃闘に安住し、まさしく帝国主义の救済者としての自らの位置を確定しつつある。この事は労働者階級のジエット闘争に対する敵対的、開港阻止決戦における「過激派」キャンペーンに真先に飛びついた民社党・日共を先頭とする既成野党の反革命的動向と相即している。一方において、先進的、革命的労働者の組織の登場は着実に階級の布陣を形成し前進している。三里塚闘争への決定的決起を押し図ると同時に増々窮地に立つ日帝のその巻返しのための侵略反革命攻撃と真正面から対決し、既成労働運動指導部の下で逡巡する広汎な動労被搾取大衆や生活諸領域に亘って苦闘を強いられる被抑圧人民に、職場地域での共同闘争を基礎とし大胆に革命的政治闘争の頂点たる三里塚闘争への決起を呼びかけ、階級深部からの不満憤激の細流を巨大な奔流へと組織する革命的国際主義的任務を断々平として展開しているのである。

統一実はこの間の援護、動労ジエット闘争との連帯、地連続決起の全成果を打ち固め、反対同盟農民との強固な結合を通じ、又獄闘いを最後まで闘い抜く溢れんばかりの決意をミナギラせている。



4.2 勝利宣言集いに14,000

全国的同志諸君、三三〇開港革命特別治安立法をはじめと開港阻止決戦の大勝利の中で、不たあらん限りの報復攻撃に出ても逮捕されたわが革命戦線きたのである。

わが同盟は、今三里塚開港阻止闘争を、反対同盟をはじめとと果敢に闘い、要塞死守戦を貫で闘い、とりわけ、三・二六を徹し、不当逮捕された。

頂点とした実力闘争の大勝利の、北原事務局長をはじめとした一六八名全労働者の先頭で闘い抜いた。

日帝・公団による二年間にわたる反革命攻撃を常にその数倍の反撃で打返してきた反対同盟、同志諸君、わが同志連帯に全力を挙げて決戦して労働者の闘いは、今決戦の大勝利で、一大攻勢、追撃戦に突入したのである。

この為、日帝国家権力は、反振替 東京〇一九五七八三を集中せよ！

遂に開港を爆砕

三月二六日、人民の総力をあげた開港阻止決戦は横堀要塞決戦、管制塔占拠戦として全面開花し、三三〇開港宣言を木っぴら微塵に打ち砕いた。この三月決戦完全勝利の凱歌とともに五月決戦に向けた臨戦体制を、三三三開港宣言統一の強化を通して打ち固めていかねばならない。

殺人攻撃弾劾

彼ら日帝の階級的報復は現状二つの方向をもつて進められている。第一が現行法規の恣意的拡大を通して治安強化であり、第二が抜本的な法改正を謀るという方針である。全国から一四〇〇〇の機動隊員をあつめながら開港できなかつた政府は、浜田幸一からウルトラカ派に援護されながら機動隊員のピストル携帯を画策しつづけている。人民に銃を向ける恐怖にかられた警官隊が一八発も

報復弾圧の激化

日帝の反革命白色報復攻撃は、不当逮捕された戦士一六五人に対する差押え決定は五月決戦に向けた予防的な拠点封鎖攻撃であり、これを認めた地裁の対応は、三権分立、司法の独立などが全くの虚構であり、文字通り国家の暴力装置であることを示して余りある。

内戦鎮圧反革命と対決し

新治安立法を爆砕せよ

七一年九・一六戦闘、七七年五月四日開港闘、そして今回の要塞死守―管制塔占拠戦を頂点とする三三三開港の大衆闘争は、いまや大衆蜂起の序章としての局地的内戦であり、わが革命派はこの闘いを文字通りの革命へと導いていかねばならない。この任務は何に



3.30 51戦士激励闘争(千葉地裁)

危機深まる日帝

彼らの危機意識は更に先行し自衛隊の治安出動にまで及んでいる。戦士は、これは完全なる獄中戦士防衛隊長官金丸は六日、衆院決算算委員会自衛隊の出動について述べ、「過激派が全国的に成田軍事基地に蜂起した時は、警察と緊密な連絡を取りながら、自衛隊が支援する形となる。自衛隊は侵略のために上陸してくる相手に百発百中で撃ち殺す訓練をしており、治安出動に対してはしっかりと決意のないまま出動することはありえない」とその反革命性を露骨にしている。

破防法攻撃粉砕

しかし、なによりも現在闘われ続けている三つの破防法裁判が「被告」弁護団・支援団体となつて検事を追いつめ、破防法そのものをめぐる論争にまで深化され、その攻撃的な展開は新たな破防法適用を困難にさせている。権力内部からも破防法に対する評価を、伝家の宝刀から、抜かずの宝刀とまで言い出す部分を生み出している。

新治安立法粉砕

国家公安委員長加藤は「警察権団への甘い対応、泳がせ政策が及ぶ範囲や団結小屋の問題などから(新治安立法は)早期に制定してもらえば準備しやすくなる。制上の不備があるなら整備すべきだ(新自衛隊・西岡幹事長)と足並をそろえている。

前号訂正

6面 5段目46・49行 「逆」に社会主義段階には、商品生産と交換は残される必要があり」

東峰だより

東峰団結小屋
電話(〇四七六)三二一〇五〇五

三月九日 早朝、戸村委員長、北原事務局長、熱田副行動隊長、岩沢、吉井実行役員宅へ航空法四九条を名目とした捜索。午前八時半、第二期工区区域内の東峰、天神峰部落の反対同盟農民が耕作を続けている農地に、機動隊に守られながら除草剤散布。

三月二六日 要塞戦士に続けと、三三三開港第一公園には全国から二万余が結集。午後一時、空港周辺に火の手が上がる。管制塔に六人の戦士が突入、占拠、完全破壊。空港中核の完全破壊によって、「三三三開港」を爆砕、偉大な勝利を勝ちとる。この戦闘の中、逃げまどう警官は拳銃を乱射。権力のあいつが殺人攻撃を許さないぞ。

三月二九日 管制塔突入戦士の勾留尋問(千葉地裁) 午前一時、千葉地裁に二〇〇人が結集し、激進行動。

三月二〇日 千葉地裁、機動隊の東山薫氏虐殺に対し「受傷は投石による」として警察側を不起訴処分。千葉地裁、県警による「犯人もみ消し」策動を許す。反対同盟はこの決定に対して、早急に千葉地裁への付審判請求を行うことを決定。

三月二七日 昨日の大敗北の報復として権力は横堀要塞へ集中攻撃。午後六時、一斉にガス弾、放水攻撃が再開され、北原事務局長、石井武さんらを逮捕。鉄塔上の四戦士あらん限りの力をふりしぼり死守戦を貫徹。機動隊要塞を制圧する中にも誰にもない。反対側の丘には反対同盟、支援が統々と結集し「機動隊粉砕」のシュプレヒコール。夜中、五十一名の要塞戦士、不当にも逮捕される。その顔には、しかし勝利の微笑がたええられていた。

四月二日 三月開港阻止勝利宣言集。全国から一万五千が三三三開港第一公園に結集。東峰十字路までデモ。

三月二三日 二六日の闘争をひかえ、ジェット燃料の輸送打ち切り。警察の「警備上の責任がもたない」という泣き言は、「三三三開港」直前の権力側の危機感をつのらせる。

三月二八日 午前八時半、関係関係会議で開港延期決定。政府声明「過激派の暴挙は法と秩序の破壊であり、民主主義体制そのものに対する重大な挑戦である。この際、極左暴力集団の徹底的取締まりのため断固たる措置をとる……」警察庁「過激派については、これまで放水、ガス銃で対抗してきたが、凶悪なゲリラ活動については警察法七条の武器使用を検討する」とし、拳銃使用殺人攻撃を公言。なお、自民党は「過激派対策」として、①武器の使用を認る警察法の改正 ②成田特別治安立法の制定 ③団結小屋の撤去を要求。更に、二六二七開港への破防法、騒乱罪の適用を考慮すると述べる。

四月三日 政府、五月二〇日開港を決定。千葉真警空警備隊設置を決定(二五〇〇人) 四月四日 反対同盟員宅、団結小屋などへガサ入れ。これ以降波状的に続く。

困難とみてつた政府は予防的に拠点をつぶせる新立法を作ろうとしている。しかもこの立法事態を防げるなら、その方向で進んで航空機に対する暴力主義が帝国主義支配の危機を強化的にのりきるためのピロウ策である。法秩序を守る立場から許せない。は行おうと認められる厳正な対応が必要だ(社会党、田原の活動の拠点となる建築物その単に警察当局の責任ではない。政治撤去できるものとする)という府はこうした事件防止のため、法一文が盛り込まれている。いかなる現行法を駆使しても闘いを封殺することができないことを見てとる。なぜならその激激の根拠は帝国主義の腐朽性にあるからであり、弾圧強化がより広がり深い階級流動と分岐を鮮明にしているからだ。日帝の政治・経済危機の深化の中でこのことはなおさら確力を立案をめぐる目論見と前記の条文が示すものは、この評価が全くのベネだということだけであ

四月五日 第二期工区内、東峰、天神峰などにまたもや除草剤散布。反対同盟、支援抗議闘争を貫徹。

四月七日 横堀要塞を不当差し押さえ

出している。今回の弾圧で特微的なことは権力・捜査当局が他の様々な機関に協力を要請していることである。

また四月五日、監視庁は逮捕者の中に公務員が含まれていたことに対して、各官庁に「人事管理の徹底」を要求する方針を固めてい

この間の積極的な防衛論議と関係する。郵政当局が該当者を早急懲戒処分していることを考え合わせれば、この三三三開港の局面が、労働者一人一人の階級的立場を問

うものとして存在していることが鮮明になる。現行法の枠内をいっばいに利用した弾圧は更に装いをかえ登場している。昨年五月、志半ばにして虐殺された戦士東山薫君の告訴闘争は死因をガス弾の直撃によるとした木村鑑定を破棄した上で権力の意を受けた裁判所の手によって却下された。この裁定は現下の情勢の中で極めて反動的かつ政治的な攻撃以外の何ものでもない。

また横堀要塞の証拠物件として不当逮捕された戦士一六五人に対する差押え決定は五月決戦に向けた予防的な拠点封鎖攻撃であり、これを認めた地裁の対応は、三権分立、司法の独立などが全くの虚構であり、文字通り国家の暴力装置であることを示して余りある。

また四月五日、監視庁は逮捕者の中に公務員が含まれていたことに対して、各官庁に「人事管理の徹底」を要求する方針を固めてい

この間の積極的な防衛論議と関係する。郵政当局が該当者を早急懲戒処分していることを考え合わせれば、この三三三開港の局面が、労働者一人一人の階級的立場を問

この間の積極的な防衛論議と関係する。郵政当局が該当者を早急懲戒処分していることを考え合わせれば、この三三三開港の局面が、労働者一人一人の階級的立場を問

この間の積極的な防衛論議と関係する。郵政当局が該当者を早急懲戒処分していることを考え合わせれば、この三三三開港の局面が、労働者一人一人の階級的立場を問



「韓国脅威論」の本質と日帝・朴体制の危機

「韓国脅威論」の登場

今日、マスコミを通じて「日韓繊維戦争」「韓国脅威」論がまことしやかに流布されている。つまり低賃金コストによりその輸出競争力はきわめて強く、繊維製品の日本市場へのなぐりこみに端緒的に見られるように、「韓国」経済の発展は、日本にとつての「脅威」となつてきているのだ。

また一方では、昨年「文芸春秋」八月号の「韓国」黒いゆ着からの離陸さらには豊田有恒著の「韓国の挑戦」などに典型的に見られるように、朴政権下の「韓国」における近代化を賛美し、「韓国」を日帝の良きパートナーとして論証せんとする試みも生れてきている。

これらの主張は、「韓国」を日帝にとつて脅威として見るか、良きパートナーとして見るかの違いはあるにせよ、輸出の脅威的増大、GNPの飛躍的成長を根拠に「韓国」を今や「先進列強国」へ仲間入りせんとしているものとして描き出し、それを可能としたところの朴軍事独裁政権の「維新体制」を賛美することに終始するものである。

そしてこれらの主張は「朴東宣事件」「ソウル地下鉄事件」がいかまじれた「日韓黒いゆ着」などはもはや過去のものであり、「韓国」経済

朴の外資導入政策

一九六二年以来、三次にわたる「経済開発計画」を通じて、朴軍事独裁政権は外資導入による「輸出振興」をはかつてきた。そしてそれが先にも述べた「高度成長」を保障してきたものなのであるが、同時に、この資本、市場を外国に依拠した南朝鮮の輸出主権経済は、技術、原材料をほとんど外国に依存した全面的な外国依存「従属経済」と結果せざるを得なかつたのである。

とりわけ、日「韓」条約以降、日帝の南朝鮮への経済侵入は、無償請求権資金、有償請求権資金をもつて開始され、さらには商業借款、資本の直接投資という形をとつて、着実に進行してきた。そして、この過程こそは、日帝が資本と技術輸出を通じて、南朝鮮経済を自己の再生産構造の一環として、再編、統合するものであった。例えば「馬山輸出自由地域」入住企業百四社中、日本が九三社にも典型的に見られるように、直接投資、そして現地資本との合併などの形態をとつた日帝の資本侵入は、南朝鮮経済の自立的発展を保障するどころか、中小資

窮乏化する南朝鮮人民

本民族を庄殺し、施設財、原資材、技術の全面にわたつて日本に依存したものと「韓国」経済を再編したのである。これは六五年から七五年末にわたる日本の対「韓」貿易収支が六五億ドルにも及ぶ黒字であり、その輸出の多くが原材料、燃料、半製品および機械類であることにもつきりあらわれている。

さらに、こうした資本侵入が、繊維、電子製品を中心とした、いわゆる「労働集約」的業種に集中していることに注目しなければならない。つまり南朝鮮人民の「低廉で質素な労働力」に依存し、日帝ブルジョアジーは膨大な利潤を獲得しているのである。

また同時に「日韓条約」以降、商業借款等を通じて「財閥」買弁ブルジョアジーを系列化してきた日本商社の南朝鮮輸出に占める役割は増大するばかりである。七五年には、駐「韓国」日本商社の輸出額は、全南朝鮮輸出の五二・七%、輸入においても六四・二%を占めてい

民族的階級的矛盾の増大

の租借地に他ならない。これを通じて日帝の南朝鮮植民地主義による搾取・収奪も、政府・民間の借款、合併会社、更にこれと提携することによって強大となつた新興財閥と多様な強収奪体制をつくりあげたのである。

以上見てきたように朴政権による高度成長の結果とは、日米帝（とりわけ米帝）を肩替りした日帝の南朝鮮支配の強化、自らの蓄積構造への組み込み以外の何ものでもない。これは、現在の円高下における「韓」日貿易の現実をいへばより一層明らかとなる。

理論的には、円高は「韓国」の対日輸出競争力を高める反面、対日輸入を抑制するはずである。しかし現実には、日本の関税障壁などの制限措置によつて対日輸出は伸びていない。輸入の面でも原料・技術などの対日依存度が高いため輸入は減りはしないのである。それどころか逆に、円高による輸入原材料価格の高騰は「韓国」の全ての輸出価格の高騰をもたらさずにはおかないのである。さらに日帝は円高で生じた

日帝の収奪強化

こうした事実、日帝が自らの危機を南朝鮮に対する支配と収奪のより一層の強化をもつて乗り切らんとしていることを明らかにしている。

「現在われわれのまわりには、現代資本主義の下での経済協力は過去の帝国主義的搾取、被搾取と異なるものである」と一般的に強調し、主体性の論理をくもらせる風潮がある。しかし六〇余年前日帝が韓国侵略のために、韓国を開港させたこと、また中国に妨害させないために韓国が中国より独立することが必要であると称して日本の経済浸透の便宜と国際的な名分のために韓国の近代的改革を要求したことを想起せよ。

ロシアの南下を阻止するために、アメリカが韓半島における権益を認めたとフット・桂協定を想起せよ。当時の日本侵略勢力は、近代商品の浸透によつて韓国の土着産業を崩壊させながら、開化派の開発意欲を利用して、日本経済の分身を浸透させ、韓国経済を日本経済に隷属する方向に誘導した。さらに日清戦争後には借款形態の間接投資とともに合作投資形態の直接投資によつてふたたび日本人の単独企業を上陸させながら、日本円の強制使用、財政改革を通じて韓国と日本をいかに単一経済圏に編成していった事実を記憶せよ。

今日のすべての事態が、イデオロギーという潤色のみをとり除けば、六〇年前の韓半島で演ぜられた事態とその状況があまりにも酷似してはいないか（「韓日白書」）と、七一年六月三日「民族守護宣言大会」で打ちならされた警鐘は、その後の過程の中で、例えば朴政権による「連年の軍事・経済政策を底支えし、軍需関連産業育成にテコ入れするKIDC等による日帝の策動として、より一層現実のものとなつてきているのである。

こうした朴政権の高度成長政策の下で南朝鮮人民は窮乏を強いられる。

また「農業近代化」「セマウル運動」がとなえられ、「大農作」などと宣伝されているが、低賃金政策による収奪の原因として農民は疲へいし、農業の破壊は進行している。この一〇年間に三〇〇万人以上が離農しているのが現実なのである。



レーニン、その序文に、「国家の問題が、現在理論的側面でも、実践的側面でも、特別な重要性をおびつつある」として一九一七年八月から九月にかけて、『国家と革命』を書き上げた。

これに先だつ『帝国主義論』の中で、帝国主義に特有な、資本主義の寄生性、腐朽性と日親主義との結びつきを明らかにし、もし『帝国主義論』の論争は、そ

第二インターによるマルクス主義の歪曲

レーニンは、その序文の中で、「一般にブルジョアジ、またとりわけ帝国主義ブルジョアジの影響下から、勤労大衆を解放するためのたたかいは、『国家』についての日親主義的偏見とたたかうことなしには不可能である。」と強調している。

レーニンにとって、このことは、自らが一九〇五年の、またとなく、一九一七年の革命の経験から得た主要な教訓であった。当時、エスエルやメンシェヴィキはみな国家の問題が実践的なられたその時期には、国家は階級対立を「和解」させるとして、マルクス国家論の本質を歪曲し、またプロレタリア階級独裁を否定するあわれむべき俗物や小ブルジョア民主主義者に完全に転落してしまつた。もとより、第二インターの指導者たちは、おしなべてそうであり、レーニンはまずなによりもマルクス主義国家論の歪曲とたたかい、それを「原状に復す」ことからはじめねばならなかつたのである。

一九一四年の帝国主義戦争は、自分たちの獲物の分配をめぐる自分たちの戦争に全世界を引きこらんだ。(帝国主義と民族、植民地問題の世界史的登場)

そして戦争の前代未聞の恐ろしさと惨禍は、ブルジョアジによってうまかされ、抑圧され、欺かれてきた幾百万、幾千万の労働者階級と勤労被搾取大衆をかつて見られない速さで立ち上らせつつあった。

しかし、まさにこのころ、第二インターの俗物や小ブル民主主義者などの国家とプロレタリアをめぐると日親主義的偏見、歪曲と斗わなくてはならなかつた。

当時、「比較的平穩に発展した数十年に蓄積した日親主義」は、一九一四年にはすっかり成長して、ブルジョアジのまきにもない手先となつて、改良主義と排外主義の先導者へとついでた。彼らは、一九一四年の戦争を「祖國擁護」という空文句でおおいかくし、「自分の国のブルジョアジの利益だけ」でなく、ほかならぬ自分の国家の利益に從順的な仕方でも順応し口先では「社会主義」を唱えながらも、行動では「帝国主義」へと完全に転落するに至つてた。

かかる第二インターの日親主義、排外主義の物質的基礎を「帝国主義論」の中で詳しく展開し、これと闘争を帝国主義批判として位置付けたレーニンは、マルクス主義のいかなる内容の去勢とそれの卑俗化から生まれてきたのかを歴史的に考察し、それを「国家と革命」第六章「日親主義によるマルクス主義の卑

利用することによって、プロレタリアートに對し革命の下準備にとりかかるよう要求する」

レーニンが要約したこのマルクス主義者の国家に對する態度に對して、カウツキーは「国家権力を『奪取すること』を単に多数者を獲得することと解釈している。だが『問題の核心は、古い国家機構一何千という糸によつてブルジョアジと結びつき骨の髄まで因習と無為がしみこんでいる国家機構が保存されるのか、それともそれが破壊されて新しい国家機構に置き換へられるのか』という点にあるのだ。」と結論づけている。

これが後に明らかにするプロレタリアートの革命的独裁の根本独裁をなすものである。

『国家と革命』は、『帝国主義論』が発表された一年後に書かれたものであるが、ちょうどその一月後にロシア社会民主党(共産)の党綱領改正をめぐるレーニンとブハリンの論争が、綱領の原則的部分の資本主義批判を削除するかどうかで闘わされた。その場においてレーニンが削除に反対し、資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をつけ加える」として帝国主義を捉えたのは、プロレタリア革命の階級性格を規定し、プロレタリアの社会主義建設の方途を説明する重要な環であつたと云える。

この相互の関係を把握することによって次の「序文」

俗化)の中で詳しく論じている。

革命の問題にたいする逃げ腰の態度、日親主義をばぐんだこの態度から、マルクス主義の歪曲とその完全な卑俗化が生じたのである。」と結論付けた。

殊にレーニンは、第二インターのもつとも有名な領袖であるカウツキーを摘出し、彼に對する系統的な批判を浴びせている。その中で、一九一四年にはすっかり成長して社会排外主義の擁護に転落したカウツキーに、ほかならぬ国家問題に對して日親主義者に譲歩する系統的な偏向があることを見抜いた。カウツキーが、彼と日親主義者との二連の論戦でほかならぬ国家の問題を避けていること、そしてまた黙過したり、あやふやな態度をとつたりしたことが積み重なつて、

利用することによって、プロレタリアートに對し革命の下準備にとりかかるよう要求する」

レーニンが要約したこのマルクス主義者の国家に對する態度に對して、カウツキーは「国家権力を『奪取すること』を単に多数者を獲得することと解釈している。だが『問題の核心は、古い国家機構一何千という糸によつてブルジョアジと結びつき骨の髄まで因習と無為がしみこんでいる国家機構が保存されるのか、それともそれが破壊されて新しい国家機構に置き換へられるのか』という点にあるのだ。」と結論づけている。

これが後に明らかにするプロレタリアートの革命的独裁の根本独裁をなすものである。

『国家と革命』は、『帝国主義論』が発表された一年後に書かれたものであるが、ちょうどその一月後にロシア社会民主党(共産)の党綱領改正をめぐるレーニンとブハリンの論争が、綱領の原則的部分の資本主義批判を削除するかどうかで闘わされた。その場においてレーニンが削除に反対し、資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をつけ加える」として帝国主義を捉えたのは、プロレタリア革命の階級性格を規定し、プロレタリアの社会主義建設の方途を説明する重要な環であつたと云える。

この相互の関係を把握することによって次の「序文」



レーニン『国家と革命』プロレタリアートの国家に對する態度とその任務

日親主義への完全な移行が不可避的に生じたとして

プロレタリアートの革命に對する態度

レーニンは、プロレタリアートの国家に對する態度の中に革命派と日親主義との分岐が形成されることを明らかにする。第二インターの空前の裏切りの後、レーニンは従来の「社会民主主義者」という呼称を排斥して、マルクス主義者としての立場を強調している。

すなわちマルクス主義者と無政府主義者の違いを次のようにいう。(1)マルクス主義者は、国家の完全な廃絶を目標としているが、この目標は、社会主義革命によつて階級が廃絶された後、国家を死滅へと導く社会主義が確立されたその結果として、はじめて実現可能なものとなることを認める。(2)マルクス主義者はプロレタリアートが権力を奪取した後、古い国家機構を完全に破壊し、それに代るにコミューン型の、武装した労働者組織からなる新しい国家機構をもつてすることが必要だと認める。(3)マルクス主義者は現代国家を

一階級が他の階級を抑制する機関である」こと、それは「武装した人間から成り立っているばかりではなく、物的な附屬物すなわち監獄やあらゆる種類の強制施設からなりたつていて、国家は階級矛盾の中から発生するので、『もつとも勢力のある、経済的支配する階級になる』こと、そしてまた『この階級は、国家を手段として政治的に支配する階級となり、こうして被支配階級を抑制し、搾取するための新しい手段を獲得すること』云々。

総じてレーニンは、国家はいつてエス・エルやメンシェヴィキが考へていたような階級対立を「和解」させる機関ではないこと、さらにカウツキーの歪曲に抗して「被搾階級の解放は、暴力革命なしに、すなわち旧い国家機構を破壊することなしには不可能であること、そしてまたプロレタリア階級独裁の国家的樹立が絶対に必要であることを強調する。

一八七二年六月、マルクスがパリ、コミューンの経験を総括しつつ、『共産宣言』の序文に唯一の修正を加えた「労働者階級は、自らの国家機構をそのまま奪いとつて自身自身の目的のために動かすことはできない」とした命題を頭に入れつつ、レーニンは「いまや、『あらゆる人民革命の前提条件』は、官僚的、軍事的国家機構を打ち破り、破壊することとする。

プロレタリアートの国家に對する態度とその任務

「エンゲルスは、この習慣の要素を強張するために、新しい世代について語っている。この世代、新しい、自由な社会的諸条件のなかですくすくと成長して来た一代が、民主共和制国家をそのなかに含めたいつかの国家制度、いつかのがらをなげ捨ててしまふ時期がくるだろう。」と。この点を明らかにするためには、国家死滅の経済的基礎という問題を分析することがぜひとも必要だ。として、このエンゲルスの見解を、『第五章 国家死滅の経済的基礎』において展開している。即ち「I. マルクスの問題提起」のなかで「マルクスの全理論とは、最も首尾一貫した、完全な考え抜かれた、内容豊かな発展の理論を現代資本主義に適用したものだ。だからマルクスにとっては当然にこの理論を資本主義の来たるべき崩壊にも、未来の共産主義の発展にも適用する問題が発生したのである。では、未来の共産主義の未来の発展などという問題を、いつたどんな根拠から提起することが出来るのか。その根拠とは、共産主義は資本主義から発生するものである、資本主義によつて生み出された社会的作用である、ということだ。として、マルクスが『ゴータ綱領批判』で明らかにしたと同様、資本主義批判に立脚し、資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後

者への革命的転化の時期がある。この過渡期の国家はプロレタリアートの革命的独裁以外の何ものでもありえない。……」ことを明らかにしたのである。それはレーニン自らがいうように「(マルクスの結論は現代資本主義社会でプロレタリアートが演ずる役割の分析と、この社会の発展に関する資料とプロレタリアートとブルジョアジとの対立する利害の非和解性についての資料に依拠してひきだされたものである。マルクスの結論を明確に発展させたものであり、『プロレタリアートは自己の解放を勝ちとるためにはブルジョアジを打倒し、政治権力を奪取し、みずからの革命的独裁をもちたてなければならぬ』から、『共産主義へ向かつて発展しつつある資本主義社会から共産主義社会への移行は、『政治上の過渡期』を経過しなければ不可能であり、この時期の国家はプロレタリアートの革命的独裁でしかありえない」としてプロレタリアート自らを支配階級にたかめ上げることと同時にプロレタリア階級独裁のもつての搾取者資本家の反抗を打ち砕くこと、更には農民をはじめとした勤労被搾取大衆を一步一歩社会主義へと結合させる階級闘争の継続の問題を明らかにする導きの糸となつていたのである。

この観点のもとでレーニンは、マルクスが『ゴータ綱領批判』で明らかにした「ブルジョアの権利」について「共産主義の第一段階(これをふつう社会主義と称している)では『ブルジョアの権利』は完全に廃止されるのではなく、ただ部分的にだけ、すでに達成されている経済的変革の度合に応じてだけ、すなわち生産手段についてだけ、廢止されるのである」として資本主義から生まれたばかりの社会主義には、資本主義の母班があり、それが小商品生産の習慣の力によつて日々再生産されることの根拠を示している。それを受けた「国家死滅の経済的基礎は、精神労働と肉體労働との対立が消滅するにつれて、したがって現代の社会的不平等の最も重要な根源の一つが消滅するにつれ共産主義が發展をとげる。しかもこの根源は、生産手段を社会的所有に移すだけでは、資本家を奪取するだけでは、絶対に除去することはできないものである」という展開がマルクスの提案を十分に生かしていることとは言うまでもない。

そして最後に彼は「我々は、国家は不可避に死滅するということだけにとどめ、この過程が長期にわたること、それが共産主義の高度の段階の發展速度に依拠していることを強調し、国家の死滅の時期と国家の死滅の具体的形態の問題はまったく今後の懸案としておく権利をもつていのだ。」と結論づけるのである。

つまり、レーニンは、マルクスの過渡期に對する見解をプロレタリア階級独裁と国家との関係でより發展させ、過渡期論の内実を豊かなものとしたのである。彼は第一版へあがきの中で「革命の経験をする」ことは、それについて書くことよりもいっそう愉快であり、またいっそう有益だから」といつた。革命の経験とそこから導き出された「プロレタリア革命と背教者カウツキー」や「プロレタリア階級独裁の時期の政治と経済」などの過渡期の説明と社会主義建設について著作と合わせて学習することによつてそれはいっそう明らかになるであろう。

プロレタリアートの国家に對する態度とその任務

「エンゲルスは、この習慣の要素を強張するために、新しい世代について語っている。この世代、新しい、自由な社会的諸条件のなかですくすくと成長して来た一代が、民主共和制国家をそのなかに含めたいつかの国家制度、いつかのがらをなげ捨ててしまふ時期がくるだろう。」と。この点を明らかにするためには、国家死滅の経済的基礎という問題を分析することがぜひとも必要だ。として、このエンゲルスの見解を、『第五章 国家死滅の経済的基礎』において展開している。即ち「I. マルクスの問題提起」のなかで「マルクスの全理論とは、最も首尾一貫した、完全な考え抜かれた、内容豊かな発展の理論を現代資本主義に適用したものだ。だからマルクスにとっては当然にこの理論を資本主義の来たるべき崩壊にも、未来の共産主義の発展にも適用する問題が発生したのである。では、未来の共産主義の未来の発展などという問題を、いつたどんな根拠から提起することが出来るのか。その根拠とは、共産主義は資本主義から発生するものである、資本主義によつて生み出された社会的作用である、ということだ。として、マルクスが『ゴータ綱領批判』で明らかにしたと同様、資本主義批判に立脚し、資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後

プロレタリアートの国家に對する態度とその任務

「エンゲルスは、この習慣の要素を強張するために、新しい世代について語っている。この世代、新しい、自由な社会的諸条件のなかですくすくと成長して来た一代が、民主共和制国家をそのなかに含めたいつかの国家制度、いつかのがらをなげ捨ててしまふ時期がくるだろう。」と。この点を明らかにするためには、国家死滅の経済的基礎という問題を分析することがぜひとも必要だ。として、このエンゲルスの見解を、『第五章 国家死滅の経済的基礎』において展開している。即ち「I. マルクスの問題提起」のなかで「マルクスの全理論とは、最も首尾一貫した、完全な考え抜かれた、内容豊かな発展の理論を現代資本主義に適用したものだ。だからマルクスにとっては当然にこの理論を資本主義の来たるべき崩壊にも、未来の共産主義の発展にも適用する問題が発生したのである。では、未来の共産主義の未来の発展などという問題を、いつたどんな根拠から提起することが出来るのか。その根拠とは、共産主義は資本主義から発生するものである、資本主義によつて生み出された社会的作用である、ということだ。として、マルクスが『ゴータ綱領批判』で明らかにしたと同様、資本主義批判に立脚し、資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後

「エンゲルスは、この習慣の要素を強張するために、新しい世代について語っている。この世代、新しい、自由な社会的諸条件のなかですくすくと成長して来た一代が、民主共和制国家をそのなかに含めたいつかの国家制度、いつかのがらをなげ捨ててしまふ時期がくるだろう。」と。この点を明らかにするためには、国家死滅の経済的基礎という問題を分析することがぜひとも必要だ。として、このエンゲルスの見解を、『第五章 国家死滅の経済的基礎』において展開している。即ち「I. マルクスの問題提起」のなかで「マルクスの全理論とは、最も首尾一貫した、完全な考え抜かれた、内容豊かな発展の理論を現代資本主義に適用したものだ。だからマルクスにとっては当然にこの理論を資本主義の来たるべき崩壊にも、未来の共産主義の発展にも適用する問題が発生したのである。では、未来の共産主義の未来の発展などという問題を、いつたどんな根拠から提起することが出来るのか。その根拠とは、共産主義は資本主義から発生するものである、資本主義によつて生み出された社会的作用である、ということだ。として、マルクスが『ゴータ綱領批判』で明らかにしたと同様、資本主義批判に立脚し、資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後